



ひるの星

No. 245

もくじ	
アブドル・バハの言葉	2
アブドル・バハの物語	3
クイズ	9
ろうそくで描く丸りよう星	10
ぬり絵	11
みんなの写真	12
保護者のページ	13



人類のあらゆる

人々に

奉仕する

よう

つねに

心がけましょう。

アブドル・バハ

アブドル・バハの物語

こども 子供たちはちょうど夕べのお祈りを終えるところでした。
ひ ろうじん その日は老人ホームで素晴らしい一日を過ごしました。老
人ホームの誰だれもが子供たちの人形芝居をととても喜んでく
れました。それが子供たちには、とてもうれしかったのです。
アニサが、

「それではお母さん、うまくいったから約束通り、アブドル・バハのお話をしてくれるのね。」と、おねがいしました。

「そうだよ、そうだよ。」と他の子供たちも賛成しました。お母さんがしばらく考えて話し始めました。

「みんな知っていた？アブドル・バハと言う名は生まれたときに付けられた名前ではないってことを。」これを聞いて子供たちはみんな驚きました。

「本当の名前は何かだったの？」とアスマがたずねました。

「バハオラが付けられた名前は、おじいさんと同じ、アッバスだったのよ。アブドル・バハというのは、神の栄光（バハオラ）に仕えるしもべ、という意味なの。アブドル・バハ御自身が選ばれた名前なのよ。バハオラは色々な美しい名を与えられたけど、アブドル・バハはこの名を一番好まれたのね。アブドル・バハが言われました。『私の名前はアブドル・バハです。私の正体はアブドル・バハです。私の資格はアブドル・バハです。私の本質はアブドル・バハです。私の誉れはアブドル・バハです。（祝福された完全）への隷属は私の榮譽あるきらめく冠です。そして全人類に対する隷属は私の永遠の信条です。』この意味はアブドル・バハが望まれているのは、世のすべての人々に仕えることなの。そして、ただひたすらそれを実行されたのよ。」と、お母さんが説明しました。

「レイゾウコ？」と、シャラがたずねました。シャラはいつも新しい言葉に興味があります。

「隷属とはしもべになると言う意味なの。『祝福された完全』とは『神の栄光』と同じくバハオラのもうひとつの呼び名なのよ。」

「それでは、シンジュは？」とアニサが大声で言いました。みんな笑ってしまいました。





「真珠じゃなくて、信条。意味は信じていることよ。」と、モナが答えました。お母さんが続けました。

「そう、ちょうど、このところよ、『全人類に対する隷属は私の永遠の信条です。』を特にみんなに覚えておいて欲しいの。アブドル・バハは、毎朝夜明けのお祈りの後、貧しい人々のお世話をするために出かけたの。食べ物や助言を与えて、ときには冬に備えて暖かい着物を与えたのよ。もし病人がいればお見舞に行つて医者代も払つたのよ。こうして一日中働いて、ときには朝食の後、何も食べないで夜遅く帰ってくることもあったの。夜は夜でお祈りして世界中の人々に手紙を書いて勇気づけ喜ばせたのよ。」

リヤズが、

「アブドル・バハがコートをあげたのを思い出したけど、そのお話どうかなあ。」いじわるをしないときは気前のいいリヤズが提案しました。お母さんが、

「いいわね、リヤズ、その話をしてくれる？」と頼みました。

リヤズが始めました。

「奥さんがアブドル・バハのために高く立派なコートをあげたら、アブドル・バハはそれを売って、そのお金で五つの安いコートを買ってほしいと言つたんだ。一つは自分用に、残りの四つは誰かにあげるようになって。そして、奥さんは言われた通りにしたんだ。」とリヤズが微笑みながら話し終えました。

「もうひとつ、」と、アスマが提案しました。「アブドル・バハが家族の夕食をあげたときのお話はどうかあ？」

「あ、それはアスマが話してくれる？」とお母さんが言いました。



アスマが始めました。

「アブドル・バハの家族が夕食を食べようとしたとき、誰かが来て、お金も食べ物もなくて困っている近所の家族がいるという話をしたらしくて、アブドル・バハは直ぐにその夕食をまとめてその家族に持って行くように言ったんだけど、アブドル・バハの家族の誰かが文句を言い始めたんだ。

そこでアブドル・バハが「次の朝は朝ごはんがちゃんとあるし、毎日三回食べている。でも、その家族は、この一回だけかも知れない。うちの家族が一回だけがまんすればいいではないか」って。

シャラが付け加えて、

「次は黒いバラのお話はどうかしら。私の一番好きなお話なのよ。」

「それはシャラが話して。できるでしょう。」と、お母さんが励ましました

「長いお話だから、覚えているかなあ。」と、シャラが心配に言いました。

「私、手伝ってもいいわ。」と、モナが言いました。早速二人が始めました。

「ニューヨークにいたとき、アブドル・バハは集会に向かっていたよ。」

と、モナが始めました。

「そこで無礼な少年たちがペルシャ服を着たアブドル・バハとその一行についてきました。」と、シャラが興奮しながら続けました。

「そして、それから」と、モナがさらに続けました。

「一行の一人であるバハイの夫人がその男の子たちに話しかけました。アブドル・バハは、みんなから愛されていて優しくていい人だから、次の日曜日に自分の家に会いに来るように招待しました。その男の子たちはみんな一番いい服を着こんで、その日曜日にやって来たのよ。みんな恥ずかしそうにしていたの。(というのは彼らはみんな貧しい出身で、夫人の家は大金持ちだったからです。)

そして、一番うしろに立っていたのが小さな黒人の少年だったのよ。彼は本当に恥ずかしそうにしている、自分が歓迎されていないと思っていたの。アブドル・バハは少年たちを見てとても喜ばれたの。」すると、いつも公平さを気にするアスマが言いました。

「ねえ、お母さん、女の子はいなかったの？」

「そうね、どうだったか、それは知らないわ。」

と、お母さんが正直に答えました。



「こら！私、話中なのよ。」と、シヤラが大声で言いました。

「アブドル・バハは少年たち^あに会ってとても喜ばれたのよ。特に黒人の少年^{とく}に会ってね。『おお、黒いバラよ！』とアブドル・バハが嬉^{うれし}そうに呼んだのよ。」シヤラは、本当に話しが上手^{じょうず}でした。

「アブドル・バハが高価^{こうか}なチョコレートの箱^{はこ}を取り出して、少年たち^{ひとりひとり}一人一人にそのチョコレートを手渡^{てわた}されたのよ。その黒人の男の子^{こくじん おとこ}には一番大きな黒いチョコレートをとりだされて、その子の頬^{ほお}に当てられたのよ。それはね、そのチョコレートがどんなにおいしくて、その子が格好^{かつこう}いいかみんなに見せるためなの。それで、他の白人の男の子^{ほか はくじん おとこ}たちみんなが彼^{かれ}を好き^すになったのよ。」とシヤラが話し終え^{はな お}ました。

「アニサもアブドル・バハのチョコレートが欲しいわ。」とため息^{いき}をつきました。子供たちみんな賛成^{さんせい}してうなずきました。お母さんもアブドル・バハの愛情^{あいじょう}が詰まったチョコレートをいただき^つたいなと思^{おも}って涙^{なみだ}があふれてきました。

「さあ、もう一つのお話^ねで、寝^ねる時間^{じかん}にしましょう。」とお母さんが続けました。

「覚えている？お手伝い^{おぼ てつだ}を希望^{きぼう}するプライドの^{たか}高い^{ふじん}夫人^{はなし}の話。」

「それ！それ！」と年上^{としうえ}の子供^{こども}たちがはやしました。

アニサがどんな話^{はなし}か楽しみ^{たの}だ、というような顔^{かお}をしました。お母さんが始めました。

「アッカのアブドル・バハをよく訪^{たず}ねていたアメリカ人でルア・ゲッチンガーという夫人^{るうごくと}がいたのよ。そのころアッカは牢獄^{らうごく}都市^とでアブドル・バハとその家族^{かぞく}はそこに住^すんでいたのよ。

彼女^{かのじよ}はアブドル・バハのようになりたい^{おも}といつも思^{おも}っていて、アブドル・バハのお手伝い^{てつだ}を^{もう}したいと申し出^でたの。ある日アブドル・バハが忙^{いそが}しかったので、代^かわりに病^{びょうき}気^きのお友^{とも}達^{だち}をお見舞^{みま}いする^まようにとルアに頼^{たの}まれたのよ。



ルアは言われた通りにそのお友達のお家に向かったのだけど、だんだん汚く、
まず貧しいところに出たの。ようやく家にたどり着くと、彼女は何か悪い予感がし
たけど、勇気を振り絞って家の中に入っていったら、中には死にそうなくらい
の重い病気を患ったひとがベットに横たわっていたの。ルアはそこにいるだけ
で、その病気をもらいそうな気がしてきたのでその家から飛び出して、アブド
ル・バハのところに真っすぐ帰って行った。そこで、自分が行ったところは
あまりにひどく、行く先が違うのではないかとアブドル・バハに聞いたの。」

「わあ、彼女は自分のことしか考えていなかったのね。」と、シャラが口を
はさみました。

お母さんが微笑みながら続けました。

「アブドル・バハは悲しそうに彼女に言われたの。『そのお友達の面倒をず
うっとみてきたので、これからも、そのつもりだった』と。ただ『今回は身体が
あかないから、代わりに彼女に頼んだのだ』と。

その人が汚れていればきれいにして、お腹が空いていれば食べさせて欲しか
ったのにと。必要であればなんでも手伝って欲しいと。その男の人に仕えるこ
とは神に仕えるのと同じだからといいました。

そう言われてルア夫人は直ぐにその貧しい男のところに引き返して、アブド
ル・バハに言われた通りにしたのよ。ちょうどアブドル・バハがされてきたよ
うにね。

ルア夫人は自分ではなく他の人が必要とすることを手伝えるのがしもべになる
ことだと習ったのね。そのことを自慢することもなくね。ほめられることもな
くね。ルア夫人が習ったことを、みんなにも
みならほ見習って欲しいのよ。」お母さんは嬉しそうに
している子供たちの顔を見回しながら
話し終えました。

「ルア夫人の奉仕という劇を
た立ち上げましょうよ！」と、モナが提案しま
した。子供たちみんなが賛成しました。

「いい考えね。」とお母さんも言いました。

「来週のフィーストで、見せてあげたらいい
わね。ただアブドル・バハの役は誰もできな
いのを、忘れないでね。」



するとリヤズが跳び上がって言いました。

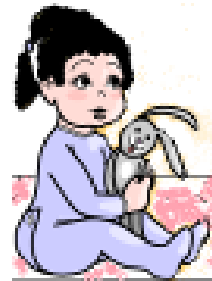
「分かった！カーテンを使って、その後ろにアブドル・バハがいるつもりで、アブドル・バハの言葉を伝える召使役の人がカーテンの後ろと前を行ったり来たりすればいよね！

たとえば、ルア夫人が『こんなはずではなかった』と、ルア夫人が言えば、召使がカーテンの後ろでアブドル・バハと相談していることにして、召使が彼女に『あなたはなんて愚かなんだ』と伝えるのは、どう？」とリヤズが言ったので、そんなことをアブドル・バハが言うはずがないと、みんな、笑ってしまいました。

その夜子供たちはみんな眠れないほど劇のことで興奮してしまいました。次の週 フィーストでその劇を見せました。シャラがルア夫人で、リヤズが貧しい病気の男、アスマが召使で、モナがナレーター、アニサがアブドル・バハ家の子供。見る方も、見せる方も、みんなが劇を楽しみました。これで、みんな人類の召使になる意味を習ったと思います。

(アブドル・バハの美しい絵はスティーヴ・パスカル氏の作品提供による Steve Pascal www.stephenpaschal.com)

*ルア夫人の絵は **The Proud Helper** の、レクス・ジョン・アーヴィング Rex John Irvine の作品



クイズ

1. お母さんは誰のお話をしたのでしょうか？

2. アブドル・バハはなぜ御自分の名前をそう呼ぶようにされたのでしょうか？

3. アブドル・バハのために奥さんが高いコートを作られたとき、アブドル・バハはどうされたのでしょうか？

4. 5つのコートをアブドル・バハはどうされたのでしょうか？

5. 近所の家族がお腹がすいていると聞いて、アブドル・バハはどうされたのでしょうか？

6. 少年たちがアブドル・バハを訪ねたとき、アブドル・バハから何をもらったのでしょうか？

7. アブドル・バハは黒人の少年を何と呼びましたか？

8. アブドル・バハの病気の友達を最初に見舞ったルア・ゲッチンガー夫人は何をしたのでしょうか？

9. 逃げ帰ってきたルア夫人にアブドル・バハは何と言われたのでしょうか？

どうでしたか？全部答えられましたか？

答えは保護者のページのお話にあります。



ろうそく^か描く九りょう^{せい}星

ざいりょう 材料

- * a.. b ..c..をなぞるページ
- * 白^{しろ}いろろうそく
- * 明^{あか}るい色^{いろ}のクレヨン (黄^{きいろ}色、オレンジ、赤^{あか})
- * 濃^こい色^{いろ}の絵具^{えのぐ}
- * キラキラのり
- * 模^も造^{ぞう}紙^し 一枚^{まい}

作り方

- * 点^{てん}でなぞる星^{ほし}の絵^えは鉛筆^{えんぴつ}ではなくて、ろうそくでなぞる。(点^{てん}はすべて線^{せん}で結^{むす}ぶ)
- * クレヨンとろうそくで星^{ほし}をぬりつぶす。
- * 濃^こい色^{いろ}の絵^えの具^ぐで絵^えの全^{ぜん}体^{たい}をぬる。
- * キラキラのりを適^{てき}当^{とう}にぬる。

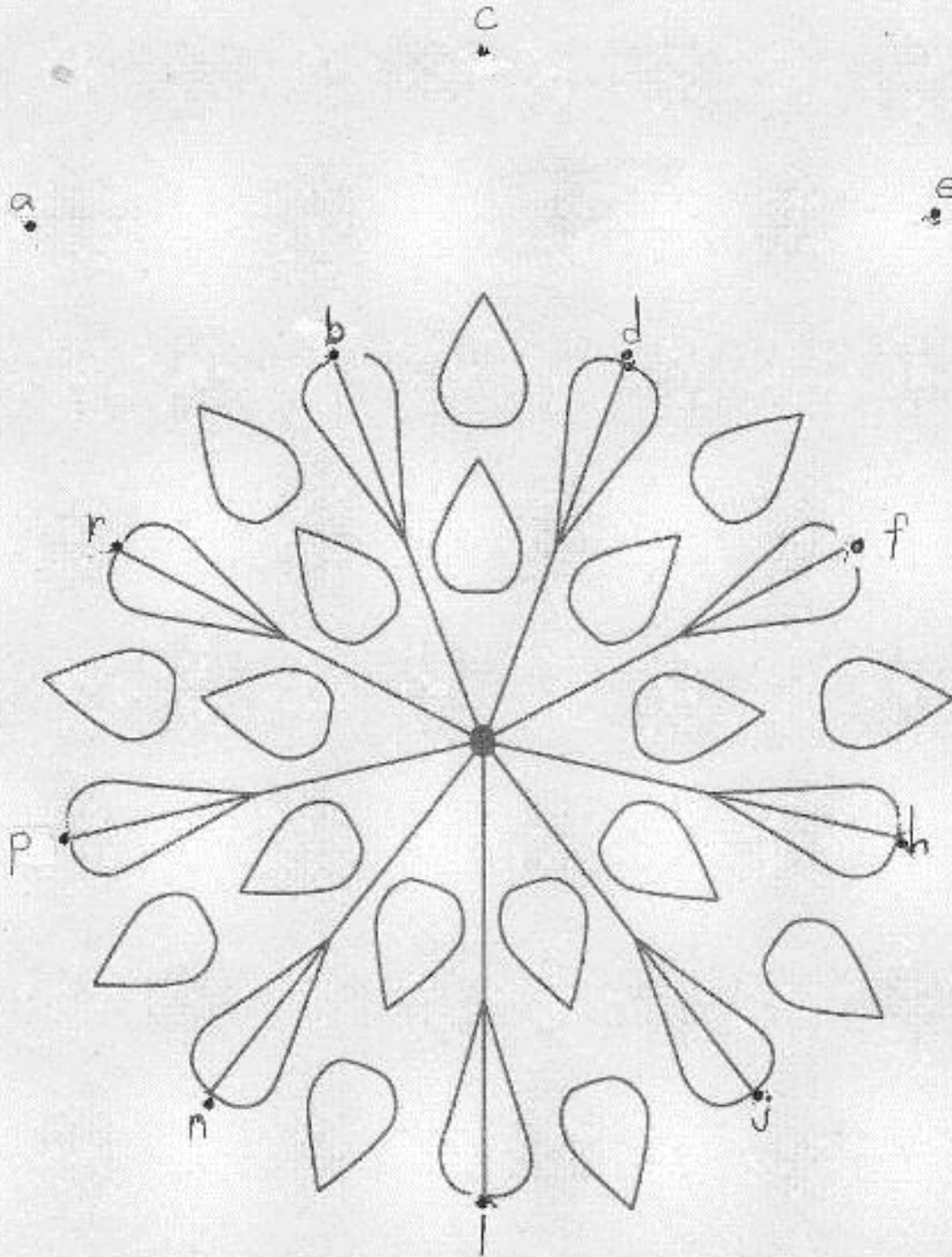


ぬり絵

a から b へ....

b から c へ....

点を全部つないで絵を完成してみましょう。



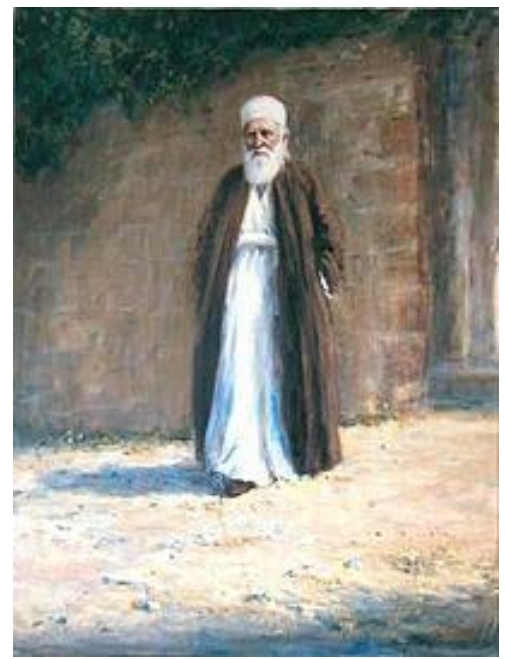


みんなの^{しゃしん}写真



保護者のページ

今回のテーマは前号に引き続いて奉仕です。アブドル・バハがそのお手本を見せてくれています。キリスト、仏様、バハオラなど、神の顕示者をまねするのはとてもむずかしいです。というわけで、新しい時代の新しい制度でアブドル・バハという素晴らしいお手本が神様から送られています。アブドル・バハ御自身の言葉で、



「私を見て、私についてきなさい、そして私のようにになりなさい。あなたや、あなたの人生のことは考えないで、食べることも、眠ることも、楽になることも、元気であるか、病気であるか、友といるか、敵といるか、ほめられるか、非難をあびるか、これらすべてを気にしないように心がけなさい。私を見て、私のようにになりなさい。あなたやこの世のことにはわずらわされないようにしなさい。そうすれば、あなたは新しく生まれ変わり、天国を見出すでしょう。

ろうそくを見てみなさい。どうやって光を放つかを。光の炎を出すために、その命の一滴一滴を涙のように落とされているではありませんか。」

現代社会のアイドルに憧れて溺れている子供たちを見ると、もっと価値ある、お手本アブドル・バハを紹介したくなります。アブドル・バハのお話がいっぱい詰まった「アブドル・バハのエピソード集」とか「大樹の泉」などを子供たちに紹介してはどうでしょうか。

- 1) アブドル・バハ。2) 名前の通り人々に仕える召使になりたかったから。3) 5つの安いコートにするように言われました。4) 一つは御自分用に残りの4つは誰かにあげるように。5) その食事をまとめて近所の家族にあげました。6) 少年たち一人一人に御自分の手からチョコレートをあげました。7) 黒いバラ。8) 何にも手伝わないで、その友達の家を飛び出して逃げ帰りました。9) その人が汚れていればきれいにして、お腹が空いていれば食べさせて、必要であればなんでも手伝ってあげるように言われました。



皆さんのお子様のバハイ活動でみんなに役に立つ
いいお話、又は写真などがあれば、送ってください。
vb7mb7@bma.biglobe.ne.jp に送ってください。

ひるの星

N o . 245

2011年3月発行

ひるの星をカラー印刷するには以下のリンクにアクセスしてください。

<http://www.bahaijpn.com/daystar.htm>

日本バハイ全国精神行政会

〒160-0022 東京都新宿区新宿7丁目2番13号

電話：03-3209-7521 F A X：03-3204-0773

ひるの星委員会：平原静志、平原ルアナ、原奈緒

協力

物語：平原ルアナ、

和訳：平原静志

写真：小島えり子、安岡直子、平原ルアナ、ジャーナルダン

絵：ステイファン・パスカル、ラリー・カーティス、バーバラ・キャスターライン、

平原ルアナ、サナ・マジズーブ、デール・モード

テクニカル・アドバイザー：尊田望

監修：平野祐一